

No 69	あごられ様連絡先	通信担当
	細田 菜理子	細谷洋子
	☎ 644-2927	☎ 823-0738
	今日のなかみ	

例会報告 1 運営委員会より 5
 例会案内 2 私が読んだ本
 私とあごられ No.17 3 「自立の心理学」 6
 "高齢者の生きる力 成長"を聴いて 4 記録考 No.17 7
 戦争を未来に伝える絵画展報告 7

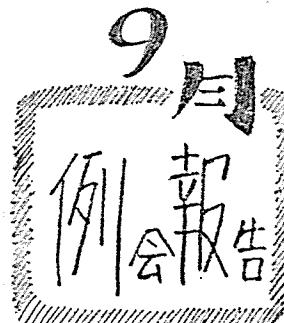
○ シンポジウム〈女が働くこと〉反省会 —— 例会報告にかけて

シンポジウムの反省会、女が働くことについてのディスカッションということで例会をもったが、正直に言ってつまらなかった、疲れた……。偏に司会者(=私)の無駄ぶりを責めているだけれど。外で働く女と家に居る女との接点を見つけ、人間の基本的欲求である労働を考えたかったはずなのに、断絶をより深めた形で終わってしまったような気がして帰途の足は重かった。

○ 故なの? 初めて例会に来ていたいたいに方々には申し分けないが、何故こんなに疲れてしまったのか考ながらペンを進めさせてもらう。司会者として、終わりにまとめるべきところ、まとまらないのに加えて、ひどい発言をしてしまった。「今ここに、生活のために好むと好まずとにかかわらず働くを得ない人がいたら、おこってしまったと思う」……「働く」ということの中に「生活のために」とそれ以外を分けて考えている自分を認識しがちでした。また、「おこって」いたのは紛れもなく自分だった。

「どうも私は働くことが好きではないらしい」「一度の食事を一度にしても働かない自由も確保したい」……適切な司会者であったなら、このへんからじっくり話も進められたであろうに、私はおこってしまったのだ。そして、ストレートにその怒りをぶつけられず、その場に居ない人の言として責任を転嫁している。

言い訳になってしまおうが。今、私はとても不本意な形で仕事をしている。昨年より、所内唯一の女性管理職である人の下で働いている。遠目には良き先輩としてあこがれに似た気持ちでいたが、いざその下で働いてみると……叱咤、日々の毎日。違う人ごとに「たいへんでしょう」「よくやつられるね」となくさめられている。生理痛や風邪で、今日は仕事にならない、と思っても、「起きれるようなら店番(実験装置の看護)くらいはできるだろうから出勤すべき」という主義で、また、その



日休と実験スケジュールも大忙に狂う、となると我身にムチ打て出勤してしまう。私がもし、日給3500円の臨時でなく正職であったなら。もし、十分に仕事をする時間があったなら（実験は5時過ぎまでかかることがしばしばで、他の人に引き継いでもらって保育園へ迎えに行く）。……こんな状況の中での欲求不満で、あたり散らしてしまったと思う。紙面を借りて、ごめんなさい。……言い訳おしまい。

さて、労働は基本的欲求であろうか。少くとも私はにとってはYes。例会で「く女が行くということ」というシンポジウムは、今さら、という感があり、私はにとっては働くことは、あたりまえで楽しい」という発言があったが、女が外で働くことが「あたりまえ」ではない現状で「あたりまえ」が共通認識となっていない前提にたってのシンポジウムであったと思う。「外で働く」とはイコール労働を

意味している。労働は私にとっては「自分のパンは自分で稼ぐ」という意味でやはり必要だ。しかし、労働を人間の基本的欲求と断定することはできない。「自分が」労働をすることが嫌な人は、どんな労働がしたいのか、それを選択できる条件は何か等も話し合ってみたかった。

緊急課題でもあり、例会でも何度も取り上げている「平等法」は、男女不平等な労働を少しでも平等にしたい女の側からの要求であり、上程された「均等法」は女をさらに分断させるような内容だった。

じっくり足元を見つめつつ、いろんな立場のいろんな女とじっくり話を煮つめるような例会にしていきたい。

（高橋芳恵・記）



- 10月13日(土) PM 6:30 ~ 9:00
- 場所 「喫茶 ミドリ」2F
中央区南4西1 箱 231-7627
(須貝ビルの並び、南西の角)

『あさら89号“均等・平等・保護”読書会 Part 1』

◇わたしの中の平等、そして保護（締集会議から）
を参考に、自分の身のまわりから、平等法について語り合いたいと思います。時間があれば、△ゆく行、てもいいんじゃない？ ◇均等法・禁等法・平等法一としてこれから、も。読んでおいでください。



◇レポーター
佐藤陽子
◇司会
後藤晶子



岡本 瑞喜子

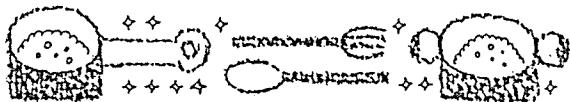
No.17

あごらと出会ったのは、2年前、「いま戦争を考える」の連続講座に友人に誘われて出席したのが初めてでした。それはそういう社会的な問題を話し合う集まりに出たこともなく、典型的な専業主婦としての生活に多少の不満を感じながらも納得し、どっぷりと浸りきっていました。たまたま、子供の健康を思ったことが、食に関する問題に興味を持ち、かかわることになり、それが様々な問題につながっていき、よく解らないなりに关心を持ちはじめた時期でもありました。そしてその後、他のいろいろな集会にも出席したりしたけれど、私は、初対面の人間に居心地の悪さというか、場違いな所へ来てしまったと思わせながら、あごらの雰囲気が良いなと思われ、あごらに続けて参加してみたいと思った動機になりました。だから、特に女の問題を考えてというより、いろいろなことを知たり、勉強できるところと思って参加し、参加してからあらためて、生きていく上

でとても大事な自分の問題として、深くその問題を考えられるようになってきたという状態です。

最初は、今迄三十何年間生きてきた価値観と相反する部分が多く、本を読んだり、話を聞くと「そうだ、そういうことなんだ」とその時は思うのに、しばらくすると「でもねー」と思ってしまう、そういうことの繰り返しだったのですが、夏の会へ一年、秋の会へ参加して半年経った今は、まだまだ抜け切れてないと思う部分も

あるけれど、日常生活の中での視点が少しづつ変わってきてると自分自身感じます。しかし、頭で考え、こうありたい、こうあて欲しいと思うことと、目の前に横たわる、現実の流れの中でぶつかってくることとのギャップは大きく、割り切っていた部分も流れ動いてきたりして、確信を持って、これが私の思いですと言いかれるものを、まだまだ持てないのですが、そこへんだけはしっかり向直って、あごらとの今後のかかわりの中で、長年に学習しながら、私なりに消化吸収した思いを持つようになっていきたいと思っています。



《お願い》

まだ「私とあごら」の原稿を書いていない方、よろしく御協力ください。手操さん、迎さん、細木さん、原稿を待っています。

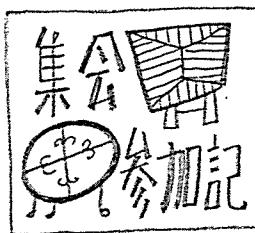
婦人ボランティア・ビューロー研修会（9月20日 婦人文化センター）

〈高齢者のこころの成長〉を聴いて

昨年度の例会、3回連続で老人問題をテーマに学習した。今振り返ってみると一つ欠けていた視点があった。何しろレポーターも討論する仲間もうち若い(?)人たちだったので、老人側からの視点に、いまひとつ迫り切れなかつた。老人問題は自分が老いてきたと自覚しなければ、本当には理解できないという。だが私達が老人となって考えるのでは遙すぎる。先日、札医大杉山教授による〈高齢者のこころの成長〉という講義を聴くことができた。今は、老人心理研究を専門とする心理学者である。欠けていたものを補足するのに恰好の内容だったので、レポーターの1人として、ミニに報告したいと思う。

まずはスライドで「イジワリハイアゲ」(長谷川町子の漫画)が写し出され、孤独な老女が生き生きと楽しく日々を暮している姿としてとりあげられる。ボディー、精神的活動を長持ちさせる生き方として理想的という解説である。以下、順を追って概略を記していく。

* 老人の特徴として“愚痴”があるが、その中に隠された心として—①年をとつていろいろ不都合が生じて情ない②しかし、それを人から責められたくなり③私達が苦労したから、若者は今、辛せでいらっしゃるのに、私達に感謝の念がない④若者がねたましい。もう一度若くなりたい—。* ひがみ根性とは、相手がすぐれてみえ、自分が劣っていると思う時におこるものであり、老人は心身の衰えを感じ、自分を



弱者、劣等者として感じることによる。愚痴に対しても、ひがみに対しても、聞き上手となつて聞いてあげること。それだけでも老人

の心は随分安定する。* 心身、特に目・耳の衰えは、心まで病ませてしまう。耳は高音に対して後退し、仕事にはそれほどでもない。* 老人にとて食欲を満たすことが全ての原点で、食事は「生きがい」を増強するための手段である。また、食事は生き方の表象であり、高齢者一人一人の文化を背景としていること。* 役割がないと老いは早まる。役割を担うことによって、尊敬の欲求、自己実現欲求が満たされる。* 疎遠しがちである老人の特徴—①身体の不調

を訴える②死にたいと言う③口数がない。しかし慣れると何時でも口から泡をとばして話す④わざと大声を出したり、まわりを困らせて周囲をひく—これらも一声かけることによって老いの孤独から救える。* 老人のわがまま

は、自己防衛手段である場合がある。自分の状態、欲求を正確に表現できないことが多いから生じる誤解だったりする。* 老人ボケは性と仮想があり、仮想ボケは周囲の不適当な扱いによる心のいらだちによる。役割なし、やがい看護、食事制限などで、欲求不満をエスカレートさせている場合、それを取り除くことによって、ボケを回復させることもできる。

以上のことを、自分の身近な高齢者を思い浮かべながら聴いた。時に自分の言動なども反省させられ、聴いてよかったです。

(今村 雅子・記)

=来年度運営委員を募集します=

今年もまた、運営委員交代の時期がやってきました。昨年度親睦会、1月例会で話し合ったように、運営委員会システムに付ける有効なシステムが考案されるまでは、重荷は順に分かれています。是非、立候補してください。立候補してくださる方は、TELしてください。(細谷 823-0738)



未定だった10・11月の例会テーマ・レポーター等は…

10月 <均等・平等・保護>
読書会 Part 1

(レポーター) 佐藤陽子
(通信担当) 後藤晶子

11月 <均等・平等・保護>
読書会 Part 2

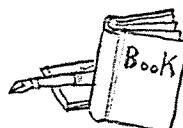
(レポーター) 久須美房子
(通信担当) 細田英理子

* 例会の司会は通信担当者です。

=月刊あごらの編集委員を募集しています=

前回おじらせしたように、

12月の月刊あごらは、札幌担当で、シンポジウムと全国運営会議の特集です。原稿の最終締切は11月10日。10月上旬には、第1回編集委員会をもちます。御協力ください。



京都のロミナンテ社で発行している、運動をしている人々の生の声で創られている雑誌「月刊 地域闘争」が、今号(1984.8号)で、女の問題を特集しています。あごら京都の塚崎美和子さんの文章も載っています。

あごら札幌で5冊引き受けています。ぜひ、御購読ください。(定価 500円、細田さんまで 683-9594)

<目次から> 離婚の女・未婚の女として差別、視界ゼロの生活がこわい、女は我慢しないかん、(資料)離婚した女たちの実状

ケニア国際婦人会議 参加旅程案内が届きました

- Aコース 7/5(金) ~ 7/19(金) 15日間
(ナイロビ・カイロ・アテネ・ロンドン)
748,000円
- Bコース 7/6(土) ~ 7/13(土) 8日間
395,000円
- Cコース 7/6(土) ~ 7/16(火) 11日間
(ナイロビ・ハリコック)
437,000円
- Dコース 7/6(土) ~ 7/17(水) 12日間
(ナイロビ・カイロ)
495,000円

* 言葉ができないても大丈夫だそうです。
どうなたか 参加しませんか。
詳細は、今村さんまで(683-9594)

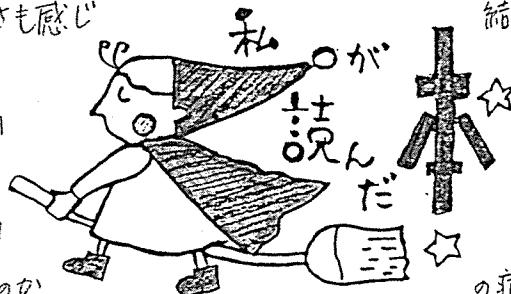
人間として自立するためには、経済的自立と、精神的自立と、生活者としての身辺自立と、3つの自立が必要だと言われてきた。あと、なるほど、そうなのかなと思いつつ、カサカニどこかで何かかかひつかがっていた。

精神的に自立するためには、経済的な自立を手に入れたいという人、いや、経済的自立に向けて踏み出すためには精神的に自立しないければ不可能だという人（一度専業主婦になってしまった女が付き始める難しさ、付き続ける難しさは、中断せずに付き続けてきた人以上にあるように思います）、そのどちらにもウンウンとうなづかされる反面、まるで鶴と印論争のような不毛さも感じていた。

経済的な自立か、人間としての自立に不可欠だとしたら、障害者の人間としての自立は不可能なのかという向かいにも、一面の真実を感じつつ、経済的自立なしでも人間としての自立は可能だと言ってしまうのにはためらいと、専業主婦の自分を肯定する論理にとびつきたいのではないかという後めたさを、どこかに感じてもいた。

あれこれ考えれば考える程、〈自立〉という抽象的な言葉で語られる山の高さ、険しさ、壮大さを痛感するばかりで、山の登り口を見出せないでいたと言ったら良いのかもしれない。

そんな時に、この本の予告が月刊あごらに載り、〈あごら26号、いま女がモ!を言うといこう!〉以来、しまようこさんの心理学に魅かれていった私は、刊行を心待ちにしていたのだ。



『自立の心理学』

—コミュニケーションと自立—

しまようこ二編

BOC出版部

¥1,800,-

た。

この本は、1年間にわたるくあごら可能性教室心理学クラスでの学習のプロセスを再録する形式になっているため、いさかまだるっこしい部分もあり、整理された論理を積み重ねて結論に導いていくスタイルの本のようにスッキリと何かかか判ったという読後感の残る本ではない。しかし、従来の心理学が、

結局のところ、現実社会にいかに適応するかという現状肯定の学問ではないか（河合隼雄など、不適応症状をひきおこす子どもは、社会の病理現象を先取りしている）

という考え方をしてはいるか）と言われ、一人の人の内側世界に主に光をあててきたのに対し、〈コミュニケーションと自立〉と副題にもあるように、コミュニケーションを自立のための重要な側面とする考え方、そして自立は個人的心理的問題よりも経済構造を小さめた社会問題であるとする考え方は、新鮮で改革のエネルギーを感じさせる。

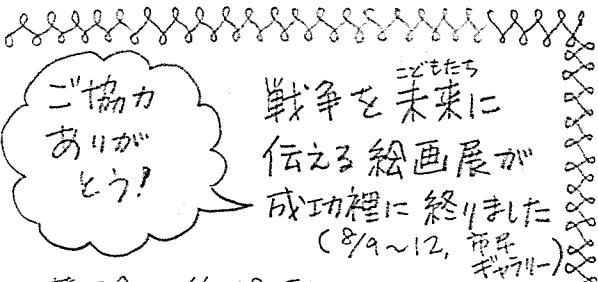
自立とは何かという問いに対する正面からの回答はないが、精神的自立と経済的自立を2本の柱とするパラダイム化した自立論を越える奥深い自立の手触りが、随所に感じられる本である。
(細谷 洋子・記)

託児ボランティアについて 気になること<その1>

気になることの1つめ。

ボランティアとは、英語の voluntary (随意の、自発的な) からきた言葉であり、その語義の通り、全く自発的・自發的な活動の総称である。それに性格を持つボランティアというものを行政が養成し、組織するというのは、どういうことなのでしょう。

確かに、最近は、行政への住民参加が言われており、特に老人福祉など公・民・私 の協働関係の模索も試みられているようである(杉並区後を良くする会等)。



収益金 約 180 万円

チケット料 70 万円 計 250 万円

総入場者数 3,000人

アート回収総数 456通

経費 150 万円をさしきいだ残金 100 万円
は、一部を丸木美術館友の会にカンパ
して他、
<戦争を未来に伝える会>を
存続して、戦争の真の姿を
次世代に伝えて
いくための活動資
金にするとのこと。



しかし、自主的に参加し協力するということと、行政に組織されてその肩代わりをするということとは、根本的に違うのではないかだろうか。

女性の社会参加、生涯学習を促進するという目的のもとに、子育て中の若い母親も切り替てるまないと、主催事業につけてきた託児をボランティア委託に切りかえるということは、安上がり福祉への明らかな後退ではないだろうか。

保育中に事故が起った場合の責任の所在は? 保育内容の問題は?

安全で、単なる一時預りではない、子どもにとって楽しい時間であることをめざす託児を(それは、預かる側と預ける側とが"共に作っていくもの"あることは前にも述べたが)無償奉仕のボランティアに求めることができますのか。それは、ボランティア保険に加入することで諸々問題なのだろうか。

ちょっと、考えてみただけで、たくさん的问题点が出てくるように思う。(細谷洋子・記)

私自身、子どもの本のついでで市内に行っていたため参加できませんでしたが、一昨年の原爆の国展以来、毎夏、戦争を次の世代に伝えていくこうした催し物、ささやかながらも成功裡に続けられていることを、とても嬉しく思います。

(細谷洋子・記)

☆ ガレージ・フェスティバル

10月10日 11:00～16:00

駅裏 8号倉庫

ミニコミ・無農薬野菜・リサクル
ショット等が出ます。

津村喬介(12:00～), 伊藤みえ
子さん(14:00)の講演も

☆ 慢性問題を考える
市民のアドバイス会

10月11日 18:00

北光教会

道新天塩支局長の
池田氏を囲んで、経済問題を含め
た地域の実情をふまえて、核廃棄物
処理場問題を考えます。

☆ 映画「海賊！」
「原発切抜帖」

11月6日～8日

教育文化会館



あとがき

☆ '84 女たちの反対運動講座

・第1回 「女たちの声をふりかえて」

9月30日(日) P.M. 1:30～

婦人文化センター

・第2回 「女たちをめぐる情況は？」

10月28日(日) P.M. 1:30～

婦人文化センター

・第3回 「女たちの声をつなぎ

あうために」

11月25日(日) P.M. 1:30～

婦人文化センター

「ひとりひとりの感じ方、考え方
の違いをつきあわせ、多様
な意見を大きく含みあい

、ふくらませて、それぞれの持ち場
へかえすことができるよう」—'84
の講座はこうした討論をつくりあ
げる場としてくみたつてみました。

みなさんとの思いを、知恵を、手をかし
てくださいませんか」という呼び
かけが来ています。

最も役に立つ小4の息子が腕を骨折し、連山金也
体調不調で、青息吐息の毎日です。丈先で、いつも
元気だけが取り柄だった私ですが、元気じゃなくなったら、
何も言いとこなくなっちゃお、ヤツ!、元気だけは出
さなくっちゃお、と、最近は、何やらい!じらしささえ感じ
られます。(と、本人が申しております。)

進筆マークの横綱を争っていた今村さんが、珍しく期限
通りに原稿をくれたのに、やつぱり、発行が遅れてしま
いました。ごめんなさい。

(Y.H.)